

ミラーリング研究の現状と課題

—言語発達への介入としてミラーリングが持つ機能—

井手 裕子¹⁾

はじめに

昨今、保健センターの2歳前後の健診時の相談には、子どもの言語発達の違いについての内容が多く、健診事後教室への誘導理由も、言語発達の違いに関するものが大半を占めている。そのような場合に母親たちに対し、一般的になされるのは、「たくさん話しかけましょう」というような指導であり、母親たちは漠然とした指導に戸惑うという。

言語発達促進の効果的なアプローチとして関わりに関しての研究は少なく、そのような研究をふまえた指導はいまだ稀少である。現時点では、子どもの注意の方向を敏感に読み取っての言葉かけ (Siller & Sigman, 2002) や、子どもの注意関心を引き付ける効果としての模倣 (Nadel, Croue, Mattinger, Canet, Hudelot, Lecuyer, & Martini, 2000; Field, Field, Sanders, & Nadel, 2001, 他) が臨床現場で注目され、自閉症児への適用 (例えば, Tigerman & Primavera, 1981; 浦島・伊藤, 2008) が行われている。

一方で、ミラーリングが子どもの情動鏡映として情動の調律的な役割を果たす (Stern, 1985) ことは古くから言われており、臨床現場においては、経験則に基づいて、母親に対して子どもの行動を実況中継するように映し返すことが指導されている (荻原, 1995)。それらをふまえ、井手 (2010) は、保健センターにおいて言語発達に遅れを持つ子どもの母親へ実際に実況中継の言葉かけを指導した結果、子どもの語彙が増加し、母子関係が安定した事例を報告している。

このように、臨床現場において、ミラーリングや模倣が、言語発達における介入の有効な手段として使用されている一方で、ミラーリングの実証研究は少なく、定義はあいまいである。

そこで本論では、研究を概観しながら、ミラーリング

の定義と機能を再検討し、言語発達に関する介入方法としての“ミラーリング”に焦点をあて、ミラーリングの有効性について考察したい。

ミラーリングの定義に関する再検討

乳児は、誕生早期から養育者 (母親) の表情に精妙な反応を見せ、対人コミュニケーションシステムを持つといわれ (Trevarthen, 1979)、それが後に発達していく言語の原型となることが多くの研究で示されている (Trevarthen, 1974, 1978, 1979; Meltzoff & Moore, 1977; やまだ, 2010, 他)。

Rochat (2001) は、乳幼児の発達として社会的随伴性をあげ、乳児が母親との情緒的な (例えば微笑みなどの) 相互交換によって、4~5ヶ月までに自分の親のタイミングや相互交換的な (例えば微笑) 頻度等への調律を発達させるとした。

一方で乳児の言語発達を促す要因は、生得的な脳機能の発達のみならず、環境内の対象や事象を参照する他者 (母親) とのコミュニケーションによる (Rochat, 2001) と言われている。環境内の対象や事象の参照とは、例えば、乳児が、対象が何かを特定し共有することや、対象の単語を乳児に指し示した母親の意図を理解することである。これらのやり取りが可能となるのは9ヶ月頃とされ (Tomasello, 1999)、6ヶ月齢期の二項関係から三項関係への移行期に発達する共同注意が目安になると言われている。

以下、このような乳幼児の発達をふまえ、ミラーリングの定義を整理し、機能について検討する。

ミラーリングの用語の整理

ミラーリングについての議論は、まず精神分析的な視点からのものであった。

Winnicott (1967) は、Lacan の論文 (Lacan, 1949) から影響を受け、日々乳児を抱っこする母親の顔が、乳児自身の感情状態を映し出すと発想した。母親が適応的な「同期した」状態で関わることは、乳児から見れば、自分の気持ちや表情を映す鏡のように共鳴するものと感

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程) (指導教員: 氏家達夫教授)

じるとした。母親の肯定的な微笑は、乳児の心地よい気持ちで固定し、現実化すること、すなわち乳児が鏡で自分を見るように自分自身を見るというフィードバックの役割を果たすとした。

Kohut (1971) は、ミラーリングを乳児が行なう母親への発信に対して、母親が目の輝きで応答することであり、乳児の誇大自己を肯定する役割を持つとした。

他方、乳児のコミュニケーション発達を視点とした研究者は、ミラーリングを、別の用語で次のように定義している。

Trevarthen (1979) は、母親が、子どもに情緒的に巻き込まれながら、子どもの最も目立った身振りを無意識的に真似することをビデオ撮影で示し、この行動を‘echo (こだま)’のような反応と記述し、mirroring (鏡映化)と同義と捉えた。鏡映化するとき、母親は、子どもの行動そのものを模倣せず、「そうなの」「あらまあ本当？」等、意味のあるものと解釈したり、赤ちゃん言葉で応答したりし、これがコミュニケーションを維持する役割を果たすとした。

Stern (1985) は、情動調律について、養育者が乳児の行動に表れる情動を察し、それに応答するような様相を使い情動状態を模倣すること、すなわち子どもと同じ知覚様式内での働きかけとしての乳児への模倣や焦点付け行動と定義している。mirroring (映し出し)については、行為自体の模倣を指すことや、他者の内的状態を反映、共有し、間主観的関わりでの情動調律を指すこともあるなど、多くの概念を包含するあいまいさを指摘しているものの、mirroring (以下、映し出しと記述する)とechoing (反響)を、情動調律と最も近い概念とした。

鯨岡 (1997, 1999) は、スプーンを持って子どもに食べさせる時に母親が入りこむ感情状態を「情動の舌」として図示し、「成り込み」と命名した。この「成り込み」について、たとえば母親の沐浴場面における乳児への「いい気もちねえ」等の表現を、母親の感応による乳児の気持ちの動きを掴んだ言葉かけとし、情動状態の共有として機能する重要な関わりと捉えた。ミラーリングという表現をしていないものの、「成り込み」は、上述のミラーリングと同義の内容を示していると考えられる。

また、Legerstee, Fsher, & Markova (2005) は、affect mirroring (情動鏡映)を、乳児の情動の反映、情動調整機能として捉え、乳児はこの反応から、応答される感覚、理解される感覚、コントロール感覚や同一性の感覚を発達させるとした。

それに先立ち、Legerstee & Varghese (2001) は、affect mirroring を、attention maintenance (注意保持)、warm sensitivity (あたたかい感受性)、social responsiveness

(社会的応答)と定義し、3ヶ月齢児の母親の関わり頻度による、乳児の向社会的行動のレベルや社会的期待の効果の差を検討した。向社会的行動とは、母親との対面場面で母親へ注意を向けやすいこと、社会的期待は、実物の母親とビデオ再生の母親とを区別(認識)できることであり、関わりが高頻度の母親の乳児はいずれの能力も高く、関わりの低頻度の母親の乳児は低かった。これは、情動鏡映の多い母親との相互作用から、乳児は情動の共有に対する安定的な期待を形成し、情動鏡映の少ない母親の乳児は、その一貫性が欠如するためそのような期待が形成されないことを示唆している。

以上から、ミラーリングは、子どもの情動を映し出す母親の行動であり、実際の行動としては、模倣、代弁、注意維持、社会的応答等が中心となっていると考えられている。これをふまえ、これらのミラーリングのなかでも中心となると考えられる模倣と注意喚起の機能を検討する。

ミラーリングの機能

母親の模倣

1) 模倣の機能

Uzgiris (1984) は、実験場面での母子の相互的な行動の再現を matching とし、母親の行う模倣と区別して、母子の対面交流場面での頻度を発達的に検討した。実験では、2ヶ月半、5ヶ月半、8ヶ月半、11ヶ月半の月年齢児の母親に対し、おもちゃを使ったわが子との対面交流場面の録画を見せ、自分たちの交流場面での matching に対する説明を求めた。その結果、より年長児の母親は、乳児の matching を意識的に行ったと述べ、自分たちの模倣を、学習(「何をすべきかを示すこと」と社会的交流(「子どもを楽しませる」「ゲーム」「母親と子どものお互いへの話し方」として捉えた。また、母親の模倣が発達にとって重要であることを自発的に言及した母親の子どもは、matching を多く行った。

反対に、matching をほとんどしなかった各月年齢児の母親は、状態の説明もなく、模倣はただ起きた自動的な反応と述べた。

この結果から Uzgiris (1984) は、これらの模倣を乳児期の母子交流のひとつの形として捉え、模倣は、他者との感情、意図理解、つながりの表現に付随し、乳児に相互理解や共有の感情を確立するという機能を持つと述べている。

Stern (1985) は、情動共有、すなわち間情動性 (inter-affectivity) の定義として、映し出し、共感的対応を述べたなかで、情動状態の共有を表す方法の1つとして模倣をとりあげた。母親の模倣は、子どもにとっては、母

親が自分のしたことをわかってくれたという理解となる。それに加えてそれが乳児自身の感情体験と関係していると乳児が認識することで、感情共有がなされるとした。つまり、感情共有がなされるために母親が行う行動として挙げられたのは、乳児の感情状態を読み取り、何らかの形で乳児の行動に対応した行動を取ることであり、この行動は、ミラーリングを表すものと考えられる。

これらの知見から、母親の「感情共有」という動機が存在する場合、模倣は、意識的な関わりとして、ミラーリングの機能を持ち始めると考えられる。

一方、佐伯（2008）は、乳児がする模倣について、意図理解の発達がなされてこそ可能となるとした。他者の模倣をするには、少なくともその対象物とそれを扱う他者の動きに注意を払い、観察することが必要となる（大藪，2004）ことから、乳児が他者を模倣するためには他者への注意、他者との共有の能力の発達が欠かせないとしている。

他者への注意に関する研究としては、Rochat（2001）が、乳児は実験手続きで、自分を模倣しない実験者より、模倣している実験者の方を見ると述べているように、母親や大人が乳児に対して行う模倣は、母親への注意を促す役割を持つと考えられる。

これらの研究と関連するのは、相手を見ることが苦手な自閉症児への模倣研究である（Tigerman & Primavera, 1981; Nadel et al., 2000; Siller et al., 2002 他）。

Nadel et al.（2000）は、自閉症児に対し、実験者が Still face（無表情）、模倣、再度 Still face、最後に自発的な遊びという行動を組み合わせた実験で、模倣の後の Still face の反応に、定型発達児と同様の、見る、触るといった反応が多くみられたことを報告し、模倣の社会的コミュニケーションの促進可能性を示唆した。

Sanefuji & Ohgami（2011）は、即時的な模倣行動時（模倣条件）の反応と、自由な即時反応時（付随条件）の反応と、Still face 時の反応を、定型発達児（平均年齢 27.41ヶ月）と、自閉症児（平均実年齢 54.38ヶ月、平均発達年齢 27.91ヶ月）で比較した。模倣条件は、子どもの行動への即時模倣で、付随条件は、模倣なしの子どもへの即時反応である。その結果、自閉症児は、付随条件より模倣条件の方が母親を長く注視し、付随条件では、最初の Still face 時や介入状況時に母親を長く見た。定型発達児は、模倣条件、付随条件のいずれも、介入時に母親を長く見た。定型発達児は、自閉症児に比して模倣に限らず母親の反応を見るが、自閉症児は、社会的な刺激に対して、模倣という同質性に反応する特徴があり、これは、自身の動きと他者の動きの間の行動的類似性の

認識が関係するとしている。そして、このつながりの感覚が、自閉症児に次の発達段階である注目の共有や意図性を促すことになると述べている。

以上は、対象児への注意、関心を引きつける効果として模倣をとらえ、コミュニケーションの成立可能性を期待するものである（浦島・伊藤，2008）。

2) 日本の模倣研究

日本では、母親の応答性や、子どもの言語発達に対する母親反応という観点で、母親の模倣の検討がされている。

戸田・東・Bornstein（1993）は、日本と北米の母親の応答性に相違（Bornstein, Toda, Azuma, Tamis-LeMonda, & Ogino, 1990）を見出したうえで、日本の5ヶ月児の母親は、乳児のネガティブでない声への模倣反応が多く、それは乳児の言語理解を促進するフィードバックの役割を持つとした。

矢藤（2007）は、子どもの発声を単純に繰り返す母親の応答が、7ヶ月に比して、12ヶ月でより多かったことから、言語発達期に、母親が繰り返し模倣することが子どもの発声を、より社会的なものとして意味づけ、強化するとした。

小椋（2014）は、言語模倣についての調査で、21ヶ月と24ヶ月児の母親は、18ヶ月児の母親に比して、子どもの言葉を広げていく拡張模倣が有意に多いことを示し、母親の模倣は子どもの言語能力を反映するとした。

このように、大人（母親）の模倣は、乳児に同意し、乳児の言わんとしていることに理解や気づきを示すことと同義であり、乳児にとって、養育者との同一性を促進させ（Legerstee et al., 2005）、その結果、大人の意図理解の発達を促すと考えられる。

母親の注意喚起

母親の注意喚起の研究は、共同注意の視点からのものが多い。

注意喚起は、相手の注意を焦点づける行動である。乳幼児に対して母親が行う注意喚起は、例えば「ほら見て」など、母親の焦点づけたい方向へ、積極的に乳児の行動を導くような、指示的要素の強い行動である。

それに比して、子どもの行動や感情を映し出すミラーリングは、子どもの行動に対して受動的に添う行動である。そのような視点に立てば、注意喚起行動は、ミラーリングではないという見解が生じる。しかし、Legerstee & Varghese（2001）は、乳児がソックスを見ることに対する母親の「ほら見て。あなたのソックスよ」と言う、注意喚起行動を注意保持行動として、ミラーリングの定義に加えている。

果たして、これはどのようなミラーリングの機能とし

て考えられるのであろうか。

Tomasello (1999) は、9ヶ月頃に、他者と自分が同じ世界を共有する存在と認識し、視線追従、強調行動、社会的参照、物体に対する大人の働きかけを真似するようになる模倣学習をすとした。また、指さし、物を人に提示する行動は、乳児の外界に対する注意に大人を同調させようとするものであると述べている。それに対して、母親の側は、多少のコミュニケーションが可能となった乳児に対して、言語的、動作的に、物を介した状態での共有を行うようになり、共同注意が成立する。

このような共同注意場面で、母親が子どもの共同注意を喚起する行動が、共同注意を促し、維持するという見解が示されている。

Adamson & Bakeman (1984) は、6ヶ月と18ヶ月時の母親の縦断的な観察研究で、注意の共有を維持させるための行動の差を検討した。6ヶ月時の母親は、対象物をより知覚的に目立たせようとする直接的指示行為や情動的関わりを多くし、18ヶ月時ではその行為が減少したことを示している。

6ヶ月齢児は、まだ注意の共有能力が弱いいため、母親は、注意や関心を維持するための目立たせ方として、情動的な注意喚起行動を行うと考えられ、東谷 (2004) は、これについて、母親が子どもの情動を調整しながら共有する行動としている。

Norimatsu (1998) は、日仏の6、7ヶ月齢児各2名で、食事場面の母親の注意喚起行動の発生契機を検討した。その結果、多くは子どもがよそ見をする場面での、次の一口を与えようとする母親からの呼びかけであった。フランスの母親の注意喚起は少なく、それは子どもの食物への注視時間が長いことが関連していた。日本の母親は、子どもに食事を継続させるために、よそ見をさせないよう呼びかけており、注意喚起行動は、子どもの行動(注意)維持の側面を持つと考えられる。

また、「乳児の発声」が母親の注意を喚起し、母親の反応と注目を引き出す場面や、乳児が他のものや他の方向に注目するとき、母親が乳児の興味の対象を察知し、同じ方向を見る、行動の描写をする、代弁をする等の場面も見られ(東谷, 2004)、注意の共有は、母親と子どもの相互交流や、ミラーリング等が絡み合いながら起き、注意喚起行動は、親が働きかける際には、付随的に現れる行動であると考えられる。

Landy (1999) の早産児に対する母親の注意喚起行動の報告では、ハイリスク早産児の母親は、おもちゃへの注意を維持させることが多く、新しいおもちゃを導入するときには、おもちゃの使い方をやってみせる等の行動をすると、その子どもの探索遊びが増加した。母親が、

乳児の行動に敏感に反応し、注意を向けさせるタイミングを図ることによって、子どもは、より多くのおもちゃ探索を示すとしている。これは、母親が、乳児と注意を共有するために、ものを持ち上げて、乳児が見えるように提示する(Sigman, 1999)など、乳児に添いながら注意を喚起することが、初期の共同注意を行ううえで重要であることを示唆している。すなわち、母親は注意を共有するために、子どもの様子をモニターし、子ども側の手がかりを使いながらタイミングを合わせる行為と、注意喚起、どちらも適切に行っていることが伺える。

以上の知見から言えることは、母親が子どもと交流したり、何らかの働きかけを行う際には、子どもの注意を引く行動として、注意喚起行動が常に付随するという点である。これは当然ミラーリングがなされる時にも同様であろう。特に、月齢の低い乳児においては覚醒状態が低く、注意を維持する能力が低いいため、子どもと交流をするときには、まずは子どもに母親を注目するよう注意を促すことが前提として必要であり、母親は、そのための合図や、注意(注視)を持続させるための行動も合わせて行うこと、すなわち注意喚起を常に行っていると考えられる。注意喚起や注意維持に関する行動も、ミラーリングの行動に付随するという点で、定義に組み込まれる(Legerstee & Varghese, 2001)のも、妥当であると思われる。

注意喚起とミラーリング

以上の知見から、母親に対してミラーリングを推奨する際は、注意喚起に関する説明が必要となってくる。前述のように、ミラーリングを自発的に行う親は、子どもに働きかける際、注意喚起を付随させている。しかし、介入対象となるようなミラーリングを自発的に行うことが少ない親が、新たな行動スキルとしてミラーリングを求められたとき、ミラーリングに注意喚起を付随させない恐れが推測される。注意喚起の適切でない関わりは、おそらくミラーリングの効果にも影響が現れる可能性がある。このように、ミラーリング推奨の際にも、ミラーリングそれ自体と、それを成功させるために行う注意喚起の部分とを分けて、考えていく必要がある。

母親のミラーリングと乳幼児の言語発達

この節では、注意喚起とミラーリングの関わり以上の知見をふまえて、母親の関わりと、乳幼児の言語発達との関連性の研究を紹介し、ミラーリング研究の今後の在り方について検討する。

注意喚起と言語発達

注意喚起は、子どもに添ったものであることが言語発達において重要であると言われている(Tomasello &

Todd, 1983; Tomasello & Farrar, 1986; Tomasello, 1988; 矢藤, 2000)。

Tomasello & Farrar (1986) が、15ヶ月児と21ヶ月児の子どもと母親の日常的な関わりを観察した結果、母親は、この時期の子どもに対して、短い文章、より多くのコメント、そして2人の関係のなかで長い会話をする事が示された。特に、子どもが注意を向けているものを言葉にする方が、より多くの語彙を学習し、母親の提示したいものへの転換は、効果が薄いとされた。

この研究からも、母親が子どもの能力に合った行動をすることで、子どもの言語発達を促す足場作りをしていることが伺える。注意喚起も、効果的な行動と、そうでない行動があり、子どもに合わせた注意喚起行動が必要となると考えられる。

共同注意と言語発達

Carpenter, Nagell, & Tomasello (1998) は、言葉を使い始めた12ヶ月時より長い時間共同注意を行った12ヶ月児の方が、その時点とその後、言葉をより多く理解し、語彙が産出されたこと、さらに母親が生後12ヶ月の子どもの注意の対象をことばで追跡(言語化)した場合、それ以降、子どもが理解語彙をより多く持ったことを示した。Tomasello (1999) はこの結果について、子どもが共同注意を伴う活動に費やした時間と、母親の「追跡」傾向を含めて結果を回帰分析し、子どもの言語理解、語彙産出を、生後12ヶ月から15ヶ月のいくつかの時点で予測することができるとした。Legerstee, Beek, & Varghese (2002) も、母親が物の名前を言うときに乳児の注意を維持させることで子どもの共同注意が増加するとした。

前述の、注意喚起の仕方に対する問題は、このように言語発達に影響を与えている。

ミラーリングと共同注意

Legerstee, Fisher, & Markova (2005) は、注意保持、温かな感受性、社会的応答として定義する調律について、母親の行う調律と、子どもへの持続的な影響の関連を検討した。3, 5, 7, 10ヶ月時に、母親と見知らぬ女性と一緒に自由遊びで観察した結果、生後3ヶ月時、調律高群の母親の子どもは、低群の母親の子どもに比して、母親への注視、微笑による母親への映し返しが見られ、月齢とともに、注意の共有が増大し、見知らぬ女性との協応的注意が多かった。この調律は、Legerstee & Varghese (2001) のミラーリングの定義と同義であり、ミラーリングの共同注意との関連性を示すことができる。

ミラーリングと言語発達との関連

以上のように、母親のミラーリングは、子どもの、大

人との情緒的な交流や共有感覚を育て、それが共同注意の発達に影響することが示唆された。

また、前節で述べたように、共同注意が多いと言語発達が促進されるという研究から、共同注意と言語発達との関連が示され、ミラーリングが多いこと(高い調律)と共同注意の増加が持続的に関係するという知見から、ミラーリングと言語発達とは、必然的に関連性が示唆された。

井手(2014)は、これらの検証として、Legerstee & Varghese (2001)の定義を、日常的に母親が関わる具体的な4つの関わり「実況」「代弁」「注意」「模倣」とし、3, 6, 18, 24ヶ月児を持つ母親への質問紙によって、その頻度と、共同注意、言語発達との関連を検討した。その結果、母親の「注意喚起」は、月年齢が上がると増加し、母親の「模倣」は減少し、先行研究と同様、母親は、子どもの発達に添った関わりをしていることが示された。また、3ヶ月齢において「実況」及び「代弁」、24ヶ月齢において「注意喚起」の頻度が高いほど言語発達や共同注意の発現時期が早く、18ヶ月齢において、「注意喚起」の頻度が高いほど言語発達の発現時期が遅いという結果が得られた。特に、発達時期に特徴のある共同注意の行動と言語発達との関連性が示されたことから、前述のように、母親のミラーリングは、乳児期から連続性を持ち、情緒の共有や社会的な交流の基礎となる母親の関わりであると考えられる。

まとめと今後の課題

母親の乳幼児に対するミラーリングは、代弁、模倣、焦点づけ、注意維持、実況中継等の要素があり、母親が子どもと交流するときに自然に行っている。特に模倣は、情動共有の機能を持ち、母親を見る等の注意喚起的な要素を付随し、言語交流以前のコミュニケーションに役立つことが示唆された。

また母親は、おもちゃの遊び方を示したり、食事を持続させるときに注意喚起したりするなど、子どもとの関わりにおいて、子どもへ注意を向けさせる行動を行う。その点から、ミラーリングを行うときにも、注意喚起を付随させる必要が生じると考えられる。

ミラーリングの効果

模倣について一子どものコミュニケーションへのフィードバック、子どもの発声を意味づけする社会化、言葉の拡張の役割効果が見出されている。自閉症児に対する効果として、注意、関心を引き付ける効果、つまり、模倣そのものが、注意喚起、コミュニケーションの成立可能性の効果を持つとされている。さらに、ミラーリングは言語発達を促す可能性が示唆された。

注意喚起について—母親は、子どもとの交流、子どもへの指示等、どのような関わりにおいても注意を喚起する行動を行っている。母親が注意喚起し、子どもが母親を見るからこそ、次の行動を共有する機会を得るのである。特に、覚醒状態の少ない早産児や月年齢の低い乳児に対しては、母親は特に、注意を引くための工夫を常にやっていると考えられる。

すなわちミラーリングを行う時、母親は付随的に子どもにも注意喚起も行っていると考えられる。このことから、注意喚起の側面の解明は重要である。

井手 (2014) は、母親の模倣が月年齢の低い3ヶ月齢に多く、注意喚起は年齢が上がるとともに多くなることを示した。それは、模倣が注意喚起の機能を持つため、月年齢の低い時期に母親が模倣を多く使って注意を引き、交流し、注意を共有できる月年齢になると、注意喚起を行って交流するように変化するのではないかと考えている。

今後の課題

ミラーリングを勧奨する場合、前述のように、注意喚起を合わせてプログラム作成することが望まれる。そのため、まずは、注意喚起の側面を検討することが、ミラーリングプログラムを進めるうえで、重要な課題となると考えられる。例えば、子どもが注意を向けているものを言葉にすること (Tomasello & Todd, 1983; Tomasello & Farrar, 1986; Tomasello, 1988; 矢藤, 2000)、子どもの注意の対象を母親が追跡すること (Tomasello, 1998) が、子どもの語彙量や理解を促すという効果をもたらすように、注意喚起の仕方とミラーリングとの関係、効果を検討することや、言語発達への影響の可能性の検討を行うことが望まれる。

多くの母親は、どのような関わりにおいても注意喚起を行うため、ミラーリングを勧奨された場合も、自分なりの注意喚起をしながら、ミラーリングを行うと思われるが、子どもとの関わりが苦手な母親にとっては、ミラーリングを行うことと、付随して注意喚起を行うことができにくい場合も考えられる。よって、注意喚起も含めたプログラム作成を行うために、今後の課題として、重要な側面であると思われる。

引用文献

- Adamson, L.B., & Bakeman, R. (1984). Mother's communicative acts: Changing during infancy. *Infant Behavior and Development*, 7, 467-478.
- Bornstein, M.H., Toda, S., Azuma, H., Tamis-LeMonda, C., & Ogino, M. (1990). Mother and Infant Activity and Interaction in Japan and in the United States: II A Comparative Microanalysis of Naturalistic Exchanges Focused on the Organisation of Infant Attention. *International Journal of Behavioral Development*, 13, 289-308.
- Carpenter, M., Nagell, K., & Tomasello, M. (1998). Social cognition, joint attention, and communicative competence from 9 to 15 months of age. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 63, 1-143.
- Field, T., Field, T., Sanders, C., & Nadel, J. (2001). Children with autism display more social behaviors after repeated imitation sessions. *Autism*, 5, 317-323.
- 東谷知佐子 (2004). 第3章 共同注意と情動 大藪泰・田中みどり・伊藤英夫編著. 共同注意の発達と臨床人間化の原点の究明, (pp.55-89) 川島書店.
- 井手裕子 (2010). 保健所における母親の心理危機状況への介入に関する一考察—言葉遅れを主訴として来所した母子の事例を通して— 金城学院大学心理臨床相談室紀要, 10, 3-11.
- 井手裕子 (2014). 母親の乳幼児に対するミラーリングの横断的検討 日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 831.
- Kohut, H. (1971). *The Analysis of The Self A Systematic Approach to the Psychoanalytic Treatment of Narcissistic Personality Disorders*. International Universities Press, New York.
- (コフォート, H. 水野信義・笠原嘉 (監訳), 近藤三男・滝川健司・小久保純 (共訳) (1994). 自己の分析みずす書房)
- 鯨岡俊 (1997). 原初的コミュニケーションの諸相. (pp.83-128) ミネルヴァ書房.
- 鯨岡俊 (1999). 関係発達論の構築—間主観的アプローチによる—. (pp.97-140) ミネルヴァ書房.
- Lacan, J. (1949). *Le Stade du Miroir*. *Ecrits*. Tavistock.
- (ラカン, J. 宮本忠雄・竹内迪也・高橋喬・佐々木孝次 (訳) (1972). わたしの機能を形成するものとしての鏡像段階 エクリ I. (pp.123-134) 弘文堂.)
- Landy, S.H., Garner, P.W., Swank, P.R., & Baldwin, C.D. (1996). Effects of maternal scaffolding during joint toy play with preterm and full-term infants. *Merrill-Palmer Quarterly*. In Japanese (Landy, S.H. (1999). 低出生体重未熟児における共同注意の発達—早期の医学的合併症および注意を向けさせる母親の行動による影響—) (ムーア, C. & ダンハム, P. 大神英裕 (監訳) (1999).

- ジョイント・アテンション心の起源とその発達を探る. (pp.211-236) ナカニシヤ出版.)
- Legerstee, M., Beek, V.Y., & Varghese, M. (2002). Effects of maintaining and redirecting infant attention on the production of referential communication in infants with and without Down syndrome. *Journal of Child Language*, 29, 23-48.
- Legerstee, M., Fsher, T., & Markova, G. (2005). The development of attention during dyadic and triadic interactions: The role of affect attunement. *Paper presented at 35th Annual Meeting of the Jean Piaget Society*. Vancouver. Canada, June, 2005. In *Infant's Sence of People Precursors to a Theory of Mind*, Press of the University of Cambridge, England.
- (レゲアスティ, M. 大藪泰 (訳) (2014). 乳児の対人感覚の発達. (pp.187-206) 新曜社.)
- Legerstee, M., & Varghese, J. (2001). The role of maternal affect mirroring on social expectancies in three-month-old infants. *Child Development*, 72, 1301-1313.
- Meltzoff, A.N., & Moore, M.H. (1977). Imitation of facial and manual gestures by human neonates. *Science*, 198, 75-8.
- Nadel, J., Croue, S., Mattinger, M.J., Canet, P., Hudelot, C., Lecuyer, C., & Martini, M. (2000). Do children with autism have expectancies about the social behavior of unfamiliar people? *Autism*, 4, 133-145.
- Norimatsu, H. (1998). *Autonomie de l'enfant: conception maternelles et realite Une comparaison franco-japonaise d'enfants de 6 a 37 mois*. These de doctorat de psychologie. Paris: Echole des Hautes Etudes en Sciences Sociales. In Japanese 則松宏子 (2004). 第12章共同注意と文化的文脈 大藪泰・田中みどり・伊藤英夫編著 共同注意の発達と臨床人間化の原点の究明 (pp.299-331) 川島書店.
- 荻原はるみ (1995). 言語発達遅滞児への早期指導と発達過程 筑波大学発達臨床心理学研究, 7, 1-12.
- 小椋たみ子 (2014). 母親の音声・言語模倣と子どもの言語発達の関係 日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 830.
- Moore, C., Dunham, P.J., (1995). *Joint Attention Its Origins and Role in Development*. Lawrence Erlbaum Associates. Inc.
- ムーア, C.・ダンハム, P.J. 大神英裕 (監訳) (1999). ジョイント・アテンション心の起源とその発達を探る. (pp.93-117) ナカニシヤ出版.
- 大藪泰 (2004). 共同注意 新生児から2歳6ヶ月までの発達過程. (pp.39-56) 川島書店.
- Rochat, P.N. (2001). *The Infant's world*. Harvard University Press.
- (ロシヤ, P. 板倉昭二, 開一夫 (監訳) (2004). 乳児の世界. ミネルヴァ書房.)
- 佐伯朕 (2008). 模倣の発達とその意味 保育学研究, 46, 347-357.
- Sanefuji, W., & Ohgami, H. (2011). Imitative Behaviors Facilitate Communicative Gaze in Children with Autism. *Infant Mental Health Journal*, 32, 134-142.
- Sigman, M. (1999). 第9章自閉症児と健常児の様々な文脈における共同注意, 大神英裕 (監訳) (1999). ジョイント・アテンション心の起源とその発達を探る. (pp.179-194) ナカニシヤ出版.
- Siller, M., & Sigman, M. (2002). The Behaviors of Parents of Children with Autism Predict the Subsequent Development of Their Children's Communication. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 32, 77-89.
- Stern, D.N. (1985). *The Interpersonal World of the Infant : A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology*. Basic Books, Inc.
- (スターン, D.N. 小此木啓吾・丸田俊彦 (監訳), 神庭靖子・神庭重信 (訳) (1989). 乳児の対人世界, 岩崎学術出版社.)
- Tigerman, E., & Primanera, L. (1981). Object manipulation : An interactional strategy with autistic children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 11, 427-438.
- 戸田須恵子・東洋・Bornstein, M.H. (1993). 13ヶ月の遊び・言語に及ぼす5ヶ月の母親の反応の影響 発達心理学研究, 4, 126-135.
- Tomasello, M. (1988). The role of joint attentional processes in early language development. *Language Science*, 10, 69-88.
- Tomasello, M (1999). *The Cultural Origins of Human Cognition*. Harvard University Press.
- (トマセロ, M. 大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本多啓 (訳) (2006). 第三章 共同注意と文化学習, 心とことばの起源を探る 文化と認知. (pp.71-126) 勁草書房.)
- Tomasello, M., & Farrar, J. (1986). Joint Attention and Early Language, *Child Development*, 57, 1454-1463.
- Tomasello, M., & Todd, J. (1983). Joint attention and

- lexical acquisition style. *First Language*, 4, 197-212.
- Trevarthen, C. (1974). Conversation with a two-month old. *New Scientist*, 62, 230-235.
- Trevarthen, C., & Hubley, P. (1978). Secondary intersubjectivity : confidence, confiding and acts of meaning in the first year, In A. Lock, (Ed.). *Action, Gesture, and Symbol*. Academic Press.
(トレヴァーセン, C.・ヒューブリー, P. 第4章 第2次相互主体性の成り立ち 鯨岡峻 (編訳著), 鯨岡和子 (訳) (1989). 母と子のあいだ—初期コミュニケーションの発達— (pp.102-162) ミネルヴァ書房.
- Trevarthen, C. (1979). Communication and cooperation in early infancy : A description of primary intersubjectivity. In M.M. Bullowa, (Ed.), *Before speech : The beginning of interpersonal communication*. New York : Cambridge University Press.
(トレヴァーセン, C. 第3章 早期乳児期における母子間のコミュニケーションと対応—第1次相互主体性について—鯨岡峻 (編訳著), 鯨岡和子 (訳) (1989). 母と子のあいだ—初期コミュニケーションの発達— (pp.69-101) ミネルヴァ書房.
- 浦島裕美・伊藤良子 (2008). 広汎性発達障害児における模倣認知と共同注意の発達の連関 東京学芸大学 紀要, 総合教育科学系, 59, 461-473.
- Uzgiris, I.C. (1984). Imitation in Infancy : Its Interpersonal Aspects. In M. Perlmutter (Ed.), parent-child interaction in child development. *The Minnesota symposium on child psychology*, 17, 1-32. Hillsdale, NJ, Erlbaum.
- Winnicott, D.W. (1967). Mirror-role of Mother and Family in Child Development. *The Predicament of the Family: a Psycho-Analytical Symposium*, Hogarth Press and the Institute of Psycho-Analysis.
(ウイニコット, D. (1967). 子どもの発達における母親と家族の鏡役割 ラファエル・レフ, J. (編), 木部則雄 (監訳) (2011). 母子臨床の精神力動精神分析・発達心理学から子育て支援へ (pp.21-29) 岩崎学術出版社.)
- やまだようこ (2010). ことばの前のことばうたうコミュニケーション 新曜社.
- 矢藤優子 (2000). 子どもとの注意を共有するための母親の注意喚起行動 : おもちゃ遊び場面の分析から発達心理学研究, 11, 153-162.
- 矢藤優子 (2007). 乳児と母親のおもちゃ遊び場面における注意の共有と母親の発話 : 7ヶ月齢と12ヶ月齢を比較して 発達心理学研究, 18, 55-66.
(2015年8月28日受稿)

ABSTRACT

An Overview of Researches on Maternal Mirroring :
Function of Mirroring for Intervention to Language Development

Yuko IDE

This paper focuses on mirroring as an intervention in language development and, through reconfirmation of its definitions and an overview of studies on approximate concepts, examines effects of the mirroring.

The mirroring is defined as becoming synchronized with emotional conditions of infants and reflecting them like a mirror. This is considered to serve an important role in encouraging infants to increase their self-awareness by functions of giving feedback, controlling emotions, maintaining communication, and sharing feelings.

During language development of a child, imitation by his/her mother plays a role in enhancing the child's understanding of language and nurturing his/her sociality.

The mirroring is always accompanied by the mother's behavior for attracting the child's attention. As preceding studies show, for drawing attention of young infants, more salient behavior is needed.

The above-mentioned knowledge suggests that in order to make the mirroring more effective it is necessary to give guidance to attract children's attention as well as recommending the mirroring itself. Therefore, further study on a role of the attention-attracting behavior in the mirroring is expected.

Key words: mirroring, mother and child relationship, infant, language development, imitation, attention alert